俺は昔から何をしても上手くいかず、親を始め周りからも疎まれてまともな人間関係を築けない社会の落伍者だった。

そしてつい数時間前、職場で人を殺した。

そいつはいつも俺の仕事の遅さや態度等、一挙手一投足をあげへつらい罵って来ていたが、俺はこれまでいくつもの仕事をクビになっていたので、今度こそ長続きするよう我慢していた。

だが、まるでコップに注がれ続けた水が溢れるように、俺の心は無意識の内に限界を迎えていたらしく、いつもの罵倒を聞いていると急に目の前が真っ白になり、気付いたら足元にそいつだった肉塊が転がり、辺りは血の海と化していた。

職場から逃げ出した後、俺は両親のいるN県の実家へと逃げ込み匿ってもらおうとしたが、両親の口から出たのは完全な拒絶と俺の存在を否定する言葉だけであった。

――数時間後。

体や服に飛び散った血と肉をシャワーで洗い流し、戸棚や冷蔵庫にあった食料を貪って空腹を満たした後、しばらくの間ぼー……としていると、やがて家の外からパトカーのサイレン音が聞こえてきた。

それから家から出てくるようにという拡声器越しの呼びかけ。

疲れきっていた俺は大人しく投降しようと玄関から外に出て行った。のだが……

多くの警察車両や警官が家を取り囲み、俺を逃すまいと厳重な警戒が敷かれていたが、何故か俺が外に出て姿を晒しても変わらず家に向かって説得を続けている。

近くにいた警官に逮捕するように話しかけても、まるでそこに存在しないかのように俺を無視。

まるで狐につままれたかのような気分で俺はゆっくりと警官や救急隊員、そして野次馬の群衆の間を抜けた後でもう一度彼らの方を振り返ると、相変わらず既に生きている者の居ない空っぽの家を取り囲み、虚しく言葉を発し続けていた。

――それからしばらくして。

俺はとある山の麓にいた。その山はN県N市のY山。

トレッキングで有名な場所であるが、同時に行方不明者が多いという事でも知られている。

幼い頃に学校の授業で初めて登らされたのだが、その時から俺はこの山に何故か強い憧憬のようなものを感じていた。

それから機会があれば個人的に何度か登ったが、時が経ち、仕事を求めて別の土地に移り住んでからはすっかり足が遠のいていた。

改めて麓から見上げるその山を見ているだけで、他では感じたことの無い懐かしさを覚え、俺はここそが自身の最期の場所だという確信を胸に抱き、山を登り始める。

「……？」

登り始めて少し経った頃、辺りに霧が立ち込めてきた。

――おかしい。これまでにこの山でこんな霧など出た事は無い。

一体何だ、これは……？

進んでいる内にどんどん霧は濃くなり、とうとう数メートル先さえ見えなくなる。辛うじて見える足元の地面や側の柵を目印に何とか足を踏み外さずに済んでいたが、このままでは先に進むのはとても困難であった。

それでも無理を押して登ろうとした時、ふいに前から「おう、来たな」と、突然声が聞こえた。

年端のいかぬ幼女のような、年を経た老婆のような、何とも判然とし難い不思議な声色であった。

俺が困惑してその場で立ち尽くしていると、ザッザッと地面を擦る音と共に、声のした方から人影が近づいてくる。

そうして現れたのは……赤い着物を着て素足に草履を履いた、幼げな少女であった。

その容姿は俺よりも一回りも背が低く、黒髪を昔ながらのおかっぱにしている。そして何より最も目を引くのは、まるでルビーの様に真っ赤なその瞳だった。

……山の中でこんな子供が一人で……？　しかも今時着物に草履（ぞうり）……？

……それにあの目……

「ついてこい」

頭の中で様々な疑問と疑念が浮かんでいたが、俺は何故か少女の声に逆らえず、戸惑いながらも黙って後ろからついて行った。その時に初めて気が付いたが、この深い霧の中で少女とその周りだけまるで切り取られたかのように視界がクッキリと開いている。

そうしてしばらく歩き続けていると急に周りの霧が減り、その先に今時珍しい茅葺（かやぶ）き屋根の平屋が佇（たたず）んでいた。

まるで昔話で出てくるような長方形の家。

……確かこういう形の家を直家（なおや）と言うのだったか？

そんな事を考えていると、少女はその家の玄関を片手でガタガタと開いて入ってゆく。

「おーいタマやー！　来たぞー！」

「おかえりなのじゃー」

中から微妙に力の抜けた子供のような声がした。

少女に続いて家の中に入るとやはり昔ながらの日本家屋で、まず始めにおおよそ15畳程の広さの土間があり、右の壁側にはかまどや水が入っているらしき甕、そして生活用品であろうか、雑多な置物が整然と並べられている。次に左側を見ると少し高めな小上がりがあってその上に広い板間、更にその先に畳敷かれた座敷が続いている。

先に入った少女は土間の隅に置いてあった木桶に甕の中の水を柄杓で移し、小上がりの縁に座ると草履を脱ぎ、足を木桶に漬けてから手拭いで水気をふき取って板間に上がる。

そんな少女から目を離し板間の先の座敷を見ると、その上で白いワンピースを着た小柄な別の少女がうつ伏せで寝転びながら漫画本を読んでいた。

少女は頭をこちらに向け、俺の姿に気づくと、本を畳に放り投げて妙にどんくさい動きで起き上がり、ドタドタと不器用そうに足音を響かせ俺の方へと向かってきた。

「おー、こんどのおもちゃがみつかったんじゃな！　よーし、きょうはうたげじゃー！」

俺の前でピョンピョンと低くジャンプするその少女の姿を見て、俺は思わず身体を硬直させた。

少女についてまず目についたのはその白く長い髪、そして何よりその頭部から突き出している耳であった。まるで獣のようなその耳は一瞬、作り物かと思ったが、彼女の動きに合わせて常にピクピクと動き、それが紛う事無き体の一部であると告げている。

そしてこちらをイタズラっぽく見つめるその瞳。まるで黄金が納められているかのような、とても美しい金色であった。

事態が飲み込めず硬直して土間に立ち尽くす俺を、赤い瞳の少女と獣耳少女が板間から見下ろす。

そのうち獣耳の少女の方がこちらをじっ……と見てふんっと鼻をならす。

「うーん……よくみたらこんどのはなんかひんそーなやつじゃのー。もつんじゃろか？」

「こういうのが案外長持ちするかもだぜ？」

何だ？　何を言っている……？　理解できない気持ち悪さと共にそのまま立ち尽くしている俺に、赤い瞳の少女がこちらを見下ろしながら語り掛ける。

「さてと……オレたちは今、とある遊びをしていてな。どっちが沢山孕(はら)めるか勝負してんだ。決着はおめえ……種馬が死ぬまでに、な」

話している言葉は理解できるはずなのに、その内容は全く意味がわからない。

「別にいいだろ？　おめえもこの山に死ぬ為に登って来たんだから。ここに来たやつはみんなそうだ。最期くらい気持ちよく逝(い)きたいだろ？　オレたちの中に沢山射精して、子孫残して終わろうぜ」

少女はそう言って着物の袖口(そでぐち)を口に当て、ニィィ……と口角を吊り上げて笑う。

「そうじゃそうじゃー」
そうして二人はそのまま俺を見下ろすような格好で、着物とワンピースの裾をたくし上げた。
その下には下着など一切着けておらず、二つの無毛の性器が俺の目の前で露になる。
俺はこの状況にポカンとした顔でしばし二人を見つめていたが、こいつらから異様さと不気味さを感じ、急いで体を玄関に向け走りだそうとした。
その時。
――――キィン
急に頭の中で耳鳴りのような甲高い音が鳴り響き、俺はその場で動けなくなる。
顔を再び二人に向けると、俺はそこに広がっている二つの女性器を無意識にじっ……と見つめ、やがて俺のチンポは知らず知らずのうちに太く固く勃起し、気づいたら下を脱いで外気に晒していた。
「え……？　な、何で……？」
まるで全身に糸を括りつけられ、誰かに勝手に動かされているような、そんな違和感に俺は絡めとられていた。
「おう、十分やる気みたいだなあ」

「ほほほ……もしたたなければわらわが狂わせてやるつもりじゃったが、てまがはぶけたのー」
　獣耳の少女は生意気そうな表情で腕組みをし、俺を見下しながらそうのたまう。
「……そうだな」
　そんな彼女を赤いの瞳の少女は横から見つめ、愛おしそうに優しく微笑んだ。
「よーしオババ、それじゃいつもどおり、どっちがさきにヤるかしょうぶじゃー！」
「おうよ」
「あー、いーに、うーさい！」
　妙な掛け声と共に二人の少女はそれぞれ向き合い、赤い瞳の少女の方はその場で正座をし、獣耳の少女は頭に両手をかざす。
「オレが先だな」
「むー……すぐにこわさんでくれよ」
「わかってるって。なるべく長持ちさせて、二人で沢山子供作ろうな」
　そう撫(なで)で回すような甘い口調で彼女と話しながら俺の方を向き、それから力が入らない俺の体を易々と片手で板間に持ち上げて床に仰向けで寝転ばすと、赤い瞳の少女は既に最大まで勃起している俺のチンポの上に股がる。

「くくく……オレたちの中はヒトの雌なんか比べもんにならねえくらい気ン持ちいいぞお」
少女はそのまま自身の女性器に俺のチンポをあてがい、一切の抵抗無く根本まで飲込んだ。
ずにゅんっ！
「――かっ！　はぁああ……！」
チンポが彼女の膣内に収まった瞬間、そのあまりの気持ちよさに頭を殴られたかのような衝撃が襲い、視界が紅く染まる。
ただ膣内に根元までチンポを挿入し終えた、たったそれだけで既に射精寸前だった。
「んー……馴染む、馴染むなあ」
少女は騎乗位の形で上から俺の顔を見下ろし、嘲笑の声色を滲ませる。
「ン？　なんだ？　やっぱり最初はもう持たねえか？　くくく……いいぜ、このまま射精しろ」
ドビュッ！　ドビュッ！　ビュッ！　ビューッ！
この言葉と同時に俺のチンポからは大量の精液が噴き出し、無意識に彼女の子宮の奥まで届かせるように腰を押し付ける。
ドクンッ！

その時、俺の脳裏に卵子に群がる精子の大群が見え、その一つが卵子の膜を破って受精している映像が浮かんできた。
何だ、これは？　幻覚……か？
「おー出てんなー。どうだ、すげえいいだろ？」
「オババーまだー？　つぎわらわやるー！」
「おう、わかってるって」
赤い瞳の少女が俺から離れると、今度は獣耳の少女が生意気そうに腕組みしながら胸を反らし、俺を見下ろす。
「ふっふーん。わらわのばんじゃ！」
彼女はそう言いながらワンピースをたくし上げて女性器を露出させ、俺の上に跨がり、俺のチンポをあてがいながらこちらを見つめて言う。
「わらわのがきもちよすぎなせいでも、すぐに死ぬでないぞ？」
そしてその体を思いっきりチンポ目がけて落とし、一気に挿入してきた。
ずぶっ！
彼女の膣内は赤い瞳の少女と比べて更に狭くキツイ。だが一度射精していくらか萎えたチンポにそのキツさはちょうど良く刺激し、再びの硬さを取り戻すのに十分であった。

そして彼女の本能に任せたような、乱暴であるが巧みにチンポの気持ちよい場所を刺激する腰振りによって、瞬く間に射精の欲求が再び沸き上がる。

「んー？　なんじゃおぬし、もうでそうなのか？　まあわらわが魅りょくてきだからしかたないの！」

彼女はこちらの顔を心底嘲笑う表情で見つめながら腰振りを早め、俺は抗えずに二度目の射精を彼女の中で行ってしまう。

ドビュッ！　ドビュッ！　ビュビューッ！

「ガッ！　グギギ、ぐうーッ！」

射精の瞬間、その膣内はまるで意思を持つように蠢き、チンポの脈動に合わせまるで牛の乳絞りをさせているかのように締まり、精液が子宮の奥まで搾り取られる感覚があった。

「おー、しゃせいしとるのー……これならまだまだヤッてもたしょうはもつかの？」

その時、またもや脳裏に先と同じように卵子とそれに群がる精子の幻覚が見え、俺は困惑を深めた。

「ん……おお、どうやら受精したようじゃぞ」

「ほれ、つぎもがんばるんじゃぞー」

馬鹿な……そんな事、あり得ない。

仮に卵子が卵管内にあったとしても、こんな直ぐに精子と受精するなど物理的に起きるわけがない。

「ここでは現世の理など通じねえよ」

混乱している俺の表情を観ながら板間のちゃぶ台に肘をつき、胡座をかいて徳利からお猪口に何らかの液体を注ぎながら赤い瞳の少女が言う。

「オレたちの卵子、受精しているところ見えたか？　そいつは幻じゃあねえぜ。わかりやすくて面白れえだろー？　ここではおめえが射精する度に確実に受精するし、いくらでも同時に妊娠出来るんだぜ」

嘲るようなその言葉を聴きながら、俺は立て続けに起こった事態に頭が凍りついた様になり、考えがまとまらない。

「ふいー、んじゃあつぎはオババじゃのー」

俺がそうして硬直している内に獣耳の少女は俺から離れる。

その戸惑いと短い間に連続で精を放った俺のチンポは、すっかり萎えてしまっていた。

「ふむ……」

俺のその様子をお猪口の中の液体をくゆらせて見ていた赤い瞳の少女は、一気にそれをあおって飲み干す。

それから静かに立ちあがると、横たわっている俺の近くに来て俺の顔をじいっとその赤い瞳を濡れそぼらせて見つめながら、蠱惑的な声色で囁いてくる。

「なあ。おめえ、今日まで人生辛いことばかりだっただろう？　ここではもう、苦しまなくていいんだ」

彼女の発する言葉は俺の耳の穴にまるで触手がねぶるようにネットリと甘く入り込み、俺の脳をジンジンと痺れさせていく。

「オレたちが普通の人間では絶対味わえない気持ち良さを与えて終わらせてやる。だからもう楽になろう」

**――俺はその言葉に、人生で一番の安心感を覚えていた。**

そうだ……今まで生きてきて良いことなど一つも無かった。幼い頃より親からは虐げられ、学校ではいじめられた。職場ではただただ搾取されるだけで、責任は全て俺だけに押し付けられた。誰も助けてはくれず、常に自分だけが世界から苦しめられ続けていた。だから、みんな殺してやった。

そうだ、俺にはもう何処にも居場所は無い。

――――人生最後、こんなに気持ち良く終われるなんて、俺は何て幸運なんだ。

そう思った途端に、身体の奥底から性欲が止めどなく溢れだす。

俺は目の前の二匹のメスを孕ませる事しか考えられなくなった。